
本の世界は崩壊する

浜田色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本の世界は崩壊する

【Nコード】

N5440P

【作者名】

浜田色

【あらすじ】

奈津実之父の書齋で一冊の本と出合った。その本は、奈津実にある提案を持ちかける。

第二章 10年後の奈津実（前書き）

5章の予定です。

第二章 10年後の奈津実

私の父が書いた本だ。

幼いときに書斎で見つけた本だったので、内容は覚えていない。父は私が五歳の時に飛行機事故に巻き込まれて死んだ。

それ以来、母は父の仕事場であった書斎に鍵をかけてしまった。愛する人との思い出が、壊れて無くなってしまわないように。

母が、閉ざした心で見つけた再婚相手は本よりもギャンブルが好きな男だった。

こんな男のどこが良かったのか、私にはわからない。

始めこそ、優しい笑顔に騙されていたが半年もすると本性が現れた。

母は毎日泣いている。

頬には青い痣があった。

何とか止めて欲しくて、男に声をかけた。

男は死んだ魚の眼をして私の腕をつかんだ。

「じゃあ、どうする？」

私は、知っていた。

母の化粧箱の一番下の隅っこに、書斎の鍵を隠しているのを。

「奈津実、どこ行くの。」

母の叫び声は、書斎の重たいドアを閉めると聞こえなくなった。

十年近く放置されていた部屋は、かび臭く埃が積もっていた。
まるで、この部屋だけ梅雨のようだった。

それでも、ずいぶん前に嗅いだことのある懐かしい匂いを感じた。
「パパ。」

私は座り込んで泣いた。

棚にある本たちは、ひそひそと囁き合っている。

ここに在る何冊かの本は魂が宿っているんだと、父が教えてくれたことがあった。

だから、部屋を出るよりは此処にいるほうが遥かにマシだと思っ
たし、はたまた夢現のせいなのか、別に気味悪いという感情も起こ
らなかった。

本棚に囲まれて、守られているような心持になって、いつの間に
か私は眠りについた。

「。。」

誰かに呼ばれた気がして、ぼんやりと顔を上げると。

「お嬢さん、風邪を引いてしまうよ。」

男の声が聞こえたので、びっくりしていると。

「机の横に籠があるだろう。その中にブランケットが入っている
から、早く羽織りなさい。」

「へ？」

窓を見ると真っ暗だった。

十一月になると昼と夜の温度差が激しくなる。

「くしゅつ。」

「ほら、言つたそばから、クシヤミが・・・」

とりあえず、「声」の言われるままに机の横を見ると、確かに籠の中に埃を被ったブランケットが入っていた。

「ありがとうございます。」

ブランケットを肩に羽織ると少し暖かくなった。周りを見渡すが、誰もいない。自分で鍵をかけて閉じこもっているのだから、人がいるわけが無いのだ。

じゃあ、一体だが。

「私は此処だよ。お嬢さん。」

後ろから声が聞こえてきたので、振り向くとやっぱり本棚しか見当たらない。

「上から二段目、右から三番目の赤い本をとってごらん。」

確かに、その場所には赤い本があった。

手にとって埃を払うと、見たことのある題字が、

『本の世界は崩壊する。』

父が書いた本だ。

幼いときに書斎で見つけた本だったので、内容は覚えていない。

「ずいぶんと泣いたようだね。」

さつきから聞こえてくる声は、紛れもなく赤い本が発していた。

「驚かないのかね。」

「パパが、本の中には魂が宿っている物もあるって言ってたから。」

「隆一のことか。」

「パパを知っているの。」

「隆一が書いた本だからね。」
「そっか。」

赤い本はため息をついた。

「彼が死んで、もう十年経った。」

「知ってるんだ。」

「我々は、そのとき御婦人に燃やされそうになったからね。」

「そうなの。」

「君は覚えてないかもしれんな。しかし、助けてくれたのはお嬢さんだったよ。」

あの日。

電話で隆一の訃報を聞いた彼女は、勢いよく部屋のドアを開けた。いつもは柔らかな笑顔で我々を撫でてくれる彼女が、真つ青な顔をして、右手にはマツチを持って叫んでいた。

「私からあの人を奪った。あの人を帰して頂戴。」

隆一が飛行機に乗ったのは、執筆した本が賞をもらって授賞式に出席するからだっただけだが、言い訳としか思えなかったよ。我々にはただの発狂した女にしか見えなかったしな。とにかく、彼女は、傍にあつた本を手に取り一冊一冊を灰にしようとしていた。

わかるかね、この恐怖が。

もう終わりだと覚悟を決めた瞬間。

小さな手が、彼女の手の中にある本を奪っていった。

「ママ。何してるの、これ、パパが書いた本じゃない。」

それが、まだ小さい、お嬢さんだった。

ご婦人は、正気を取り戻してその場に泣き崩れた。

君は奪った本を手にとって優しく、いつもご婦人がするように撫でてくれた。

「もしかして、その本は貴方だったの？」

赤い本は、私の質問には答えずに、

「あれから、部屋のドアが開いたことは今日まで一度もなかったが。」

と、彼が人間ならば「チラリと横目で私を見た」とでも続く文章が置かれたに違いない。

「じつは、この十年間いろいろあったの。」

私は、母が心を閉ざしてしまったこと。

継父の横暴を、言葉を話す本に全て話してしまった。

「ふうむ。」

赤い本は、何か考えているようだった。

「私たち、いつかあの男に殺されてしまいかもしれない。今日だって、私……。アイツに襲われそうになったのよ。もう、嫌。本当はこの家から逃げ出したいのに、ママをおいて出て行けない。ママは、何処か壊れちゃってるのよ。毎日痣が増えていくの、それなのになんでもない顔して……。私が家を出ようって言うっても、笑って首を振るだけ。」

母が笑った後は、いつもこう言うのだ。

『大丈夫よ』

「だとすれば……。それは、お嬢さんに心配をかけたく無いからではないかな。」

「そんな優しさなんていらない。私はただ、自由になりたいだけなの。」

いつまで、私たちはこんな生活に耐えなければいけないのか。

考え出すと、また、涙が溢れてきて一滴が赤い本の上に落ちた。

「ごめんなさい。」

「かまわないよ。」

指で赤い表紙を撫でると、

「ああ、十年前と同じだ。やっぱりあの時のお嬢さんだ。」と笑っているようだった。

「君の話を聞いていると。要するに、その新しい父親いなくなれば良いんだね。」

「そんなの無理よ、アイツはずっと此処に居続けるわ。」

父が死んで、多額の保険金が入ったのをいいことに、あの男は再婚すると会社を起こすからと言って、仕事を辞めてしまった。しかし、数年経つても何かをする素振りすら見せていない。

私には、楽して暮らしたいが為に未亡人に近づいたのではないかと考えるようになっていた。

「仮に追い出せたとしても・・・どうかしら、何かとんでもない恐ろし事を起こすかもしれない。だから、二人で逃げるしかないの。アイツの手が届かないところへ。」

遠く、遠く。

「我々としては、賢い選択とは思えないがね。」

赤い本が、ため息をついた。

「何か他にいい方法があるの。」

たいした期待はしていなかったが、私は赤い本が何か迷っているような気がして答えを待っていた。

「如何しようか。」

「ねえ、何か方法があるなら教えて頂戴。」

どんどんどんどん。

私の気持ちに同調するように、本棚の本たちが震えだした。

「お嬢さんは、昔我々を助けてくれた。」

どんどんどんどん。

「ふむ。今度は我々が助ける番だな。」

「如何すればいいの。」

どん

本たちは一斉に静まり返った。
赤い本が間を置いて一言。

「この世界から、人間を消す方法があるんだがね。」

「え。」

私は、頭が真っ白になった。

「まあ、少し考えてみるといい。その男が本当にこの世にいても良いぐらいの、愚かな人間ならば方法を教えてあげよう。それに、さっきからドアの向こうで女性の声が聞こえる。君の母親ではないかな？」

耳を澄ましてみると、厚いドアの向こうから母の声が聞こえた。

第三章 本の世界

「奈津実、此処にいるんですよ。早く開けなさい。」

奈津実は、真っ青な顔をして書斎のドアを開けた。

「ママ、ごめんなさい。」

瞼が赤く腫れていた。

ずっと泣いていたのかしら。

「さつき何があつたの。どうして書斎の鍵を持ち出したりしたの。」

「

奈津実は書斎から持ち出したらしい赤い本を握り締めながら、

「なんでもないの。」

とだけ言つて、自分の部屋に帰ってしまった。

学校で何かあつたのかしら。

そんなことを思いながら、気がつくと書斎のドアノブに触れている自分に気がつく。

「あなた。」

如何して、いなくなってしまったの。

少しだけ開いていたドアを、ゆっくりと閉める。

彼らには可哀想だけど、私には本の声は聞こえないから。

隆一さんの心を奪って離さなかった本の世界。

私には、少しだけ彼らが妬ましかった。

奈津実。

あなたも、同じ世界を見ることができるとかしら。

「ねえ、パパの事なにか話して。」

私は、自分のベットに横たわると、勉強机の上に置いた赤い本に話しかけた。

さっきまでの事が本当に夢ではなかったのか。

（本が言葉を話すなんて、現実にはありえるのだろうか）
ふと、思ってしまったからだ。

「隆一は、お嬢さんに良く似ていたよ。」

「本当？」

「ああ、目が良く似ている。鼻は、母親似かな。」

私は苦笑いをした。

鼻が低いのを気にしているからだ。

やっぱり、夢じゃなかったんだ。

「パパも、こうやってあなた達とお話してた？」

「いや。我々は人間と話しをしてはいけない決まりになっているのだよ。」

どういふことかと首を傾げたが、赤い本は話を続けた。

「隆一は変わった人間だった。読み終えた本には必ず『ありがとう』と声をかけた。勿論、返事など返さないがね・・・しかし、中には嬉しくて『どういたしまして』なんて返してしまう本はいたが、

そんな時も隆一は別に驚く事も無く、ただ、にっこりと笑うだけだった。」

私は、もう顔をはつきりと思い出すことができない父の姿を、赤い本の言葉から頭の中で像を描いていく。

背が高くて、

色の白い肌、

黒の髪に、私と同じ釣り目の真っ黒な瞳。

「彼は、一日の大半を書斎で過ごしていた。」

懐かしさと寂しさの混じった声だったので、私はベッドから起き上がって、本を撫でた。

「私も、本を読むのが好きなの。パパと同じね。」

「嬉しいよ。」

「ねえ、さっき言ってたけど、本が人と話してはいけないうって、どうということ？」

「そういう決まりなのだよ。」

「じゃあ、どうしてあなたは私と話をするの？いけないことじゃないの。」

その時、ドアをノックする音が聞こえたので、私が返事をする3センチ程の隙間から、義父が顔を覗かせた。

「何。」

私はさっきの事があったので、恐怖にひきつった表情をしていたのだろう。

男は私とは目を合わせずに、

「さっきは、悪かったな。」

とだけ言って立ち去ってしまった。

何かされるのではないかと考えていたので、男がいなくなると安堵の溜息を漏らした。

「あの男かね。」

「そう。」

私は、あの男に掴まれた腕に触れた。もう感触は無くなっていたが思い出すと鳥肌が立った。

「どう思った？」

「今のでは、わからないよ。」

赤い本は少し困ったのだろう。私は無意識に赤い本を抱きしめている事に気がついて、慌てて机の上に戻した。が、よくよく考えてみれば、おかしい事などひとつも無いのに一体私は何を慌てたのだろう。自分が今抱きしめていたのは、ただの本なのに。

「お嬢さん。」

「は、はい？」

少し裏返った声で返事をしてしまったが、赤い本は気にせずに。

「私を嫌いにならないでほしいんだ。」

一体何の事だろうと思ったが。

「どうして？あなたの事を嫌いになったりするの。」

赤い本は、きっと人間なら父のように優しく笑うのだろう。

「さっき聞いた事と関係あるの？」

「ふふ…そう。お嬢さんの言う通り、我々には『本の決まり』というものがある。」

私たちは自分自身の世界を守らなければいけない。

どういう事かというと、

本は変化してはいけない

ということだ。

「我々と人間の違うところは、結末を変えることができるか、できないかだ。」

赤い本曰く。本の世界は、作家が作ったストーリーそのものの事で、物語がどんなに残酷で悲しい結末でも、そのままの世界を守らなければいけないのだそうだ。

「人魚姫が死んでしまうのを、助けられないみたいに？」

「君達の世界で起った出来事なら、誰かが何とかして助けてあげようと、行動するかもしれない。だが、そんな可能性は本の世界に存在してはいけないんだよ。そう、彼女は結末の為に死ななければいけないのだから。」

「もし、結末が変わってしまったら？」

「本の世界が壊れてしまう。」

それこそ、泡になって消えてしまうようにね。と、赤い本は言った。

「わかるかね？本の世界は、生まれたときから終わりが決まっている。しかし、人間の世界は結末が用意されていない。自分で作るんだ」

私には、赤い本がわずかに震えているように見えた。

「だから、結末を変えることが出来る人間と話をすることは、少なからず本に影響を与えてしまうことになる。」

私は、ふと疑問に思った事があったので聞いてみた。

「ねえ、私と話をしてるのって大丈夫なの。あなたの世界が変わることってないの？」

「私が変わることを望まなければね。」

「そう。」

赤い本の話、半分も理解できなかった。まるで、難しい数学の授業を受けているようで、眠気が少しずつやってきた。

「お嬢さん。」

私は欠伸をしながら、

「奈津美でいいよ。」

布団が肌に触れる感覚が気持ち良く、瞼が下がってくる。

「奈津美。」

「ん？」

「私は、」

深い眠りに着いた私に、先の言葉は聞こえなかった。

第四章 図書館の中で

次の日。

昨日の事などまるで何もなかったように母が朝食を作っていた。

「あら、日曜日なのに早いのね。」

にっこりと笑うのだ。

覚えてないわけではないのに、過去の事として処理されるのだ。

「ねえ。アイツに殴られた所、大丈夫なの？」

「ああ。」

母は青く滲んだ頬を触りながら、「そういえば、そうだったわね。」

と、まるで「蚊に刺された程度の傷」のように言うのに私は腹が立った。

どんなに義父に殴られても、私と喧嘩をしても、母自信が声をあげて泣いても。次の日には母の壊れた頭の中ではリセットされている。

気味が悪かった。

あまり家に居なくなかったので、近くにある図書館に行くことにした。なるべく長い時間を過ごしたかったので、勉強道具も一緒に持っていく。もちろん赤い本も鞆に入れた。

家を出る前に母に義父は？と聞くと。

「まだ寝てるみたい。」

と、寂しく笑った。

あんな男でもそばにいて欲しいんだ…。そう思うと、なんだか悲しくなった。

「奈津美。」

「何。」

「書斎の鍵、あなたが持つてなさい。」

母は、少しだけ頬に痛みを感じたのか上がった口角が歪んでいた。
「いいの？」

「そのかわり、悩み事があるなら話して欲しいの。書斎に閉じこもるんじゃないくて、誰かに相談して頂戴。」

私は、返事をしたが、母と目を合わせなかった。

あの時、母の顔を真っ直ぐに見ていれば何かが変わっていたのだろうか。

図書館にいけば、赤い本の言う本の世界が大勢息を潜めて待つている。

誰かに読んでもらえる事を夢見ながら、きっと各々の世界を大切に守っているのだろう。

今日は、折角なので父の書いた本を探すことにした。

鞆の中の赤い本が話しかけてくれなかったのが、寂しかったのかもしれない。

「あ。」

私は、探していた本を手にとった。

埃を払うと、見たことのある題字が、

『本の世界は崩壊する。』

父が書いた本だ。

ページをめくっていくと、私は奇妙な感覚に襲われた。

『主人公は私と同じ歳の女の子。

父親は幼いときに死んでいて、再婚した新しい父親は母親に暴力を振るっている。』

ここまでは、他の小説でもよくあることだと思っていた。

『耐え切れなくなった主人公が、書斎に引き籠った時に一冊の本に出会う。』

きつと、たまたま同じなのだと…。

『赤い本は彼女に、こう言った。』

依然、鞆の中の赤い本は黙ったままだ。

『この世界から、人間を消す方法があるんだがね。』

同じだ。

この物語の主人公は、私なんだ。

怖いけれど、どんどん先を読み進めていく。私が・・・いや、本の中の私が図書館で同じように本を読んでいる。

これは今の私だ。

じゃあ、ここから先はこれから起る出来事ということになる。

『私はなにか、嫌な予感がして家に帰る。』

どうか何事ありませんように。

祈りながらドアを開ける。

靴を脱いで、母を呼んでみる。

返事がない。

一層怖くなって、リビングへ急ぐ。

何かの臭いがする。

血の、

「ママ！」

手から本が滑り落ちた。

頭が真っ白だ。

母は本の中で殺されてしまった。

「どういう事？」

鞆の中の赤い本を掴み出す。

「ねえ、どういう事よ。説明して！」

図書館ということをすっかり忘れて、私は赤い本に大声で怒鳴っていた。

「何であなたの本に、私たちの事が書いてあるの。ここは人間の世界でしょ。」

赤い本は何も言わなかった。

またページをめくり出す。

『私は、泣きながら冷たくなった母を抱きしめている。背後から男がナイフを持って現れる。驚いた私は書斎に逃げ込み鍵をかける。』

「私は、あなたの物語の世界の一部なの？」

「奈津美。」

赤い本がやっと口を開いた。

「私には、この世界を守る義務がある。」

優しい口調だが、私の心を刺すような冷たい言葉だと思った。赤い本の言う通りだとすると、母はあの男に殺されてしまう。

「嫌よ。ママを殺さないで。お願い。」

涙があふれてくる。

「言っただろう。本の世界には結末があるんだ。結末は、変えられない。」

「そんなの聞きたくないっ。」

両手で耳を塞いだ。

「こんなの、嫌だよ。」

「奈津美……。」

こんな終わりは奈津美キライ。

そういつて、父を困らせたことがあった。父が読み聞かせてくれた本が悲しい結末だったりすると、怒ったり泣いたりした。無理矢理マジックで話しを書き換えて、ひどく怒られたこともあった。

「奈津美。もう少し先を読んでごらん。」

私は、潤んだ目を擦りながら、続きを読み始めた。

『書斎のドアは今にも蹴破られそうだった。』

恐らく、私も母のように殺されるのだろう。
涙がぼろぼろ零れた。

こんな事になるなんて。

ドアを叩く音は、どんどん大きくなる。

怖くて赤い本を抱きしめる。

「お嬢さん。私の言うことを良く聞いて。」

「え。」

「悪いようにはしない。君の父親が入ってきたら、私を開けて彼のほうに向けて欲しいんだ。」

本棚の本は、恐怖のためか静まり返っている。

まるで、この後何が起こるのかを知っているかのように。
ばん。

開けられたドアの向こうに、義父が立っている。

目は何処か遠くを見つめながら、右手に持ったナイフが異様な光を放っている。

「助けて。」

小さく叫びながら、言われたとおり本を開いた。

男はこちらに向かってくる。

もう駄目だ。

あきらめて、目をつぶった。

ばたん。

何かに蓋をするような、大きな音が聞こえた。

「奈津実。もう大丈夫だよ。」

赤い本の声が聞こえたので、少しだけ目を開けてみる。

「目を開けてごらん。」

黒い髪に、色の白い肌。

少しつりあがった目に、黒い瞳が揺れる。

私が想像していた、そのままの父が目の前に立っていた。

「まさに間一髪だった。もう少し遅ければ、君は殺されていたかもしれないな。」

私が手に持っていた本を、男は大事そうに受け取った。

名残惜しそうに本を閉じる。

「悪くない世界だったが、君のように自由に動ける方が良い。身の危険を感じた時に、逃げることもできるからね。」

私は、目の前の男がああ赤い本だという事を、やっと理解した。

「あいつは？」

男は手に持っている、さっきまで自分自身だった赤い本を優しく叩いた。

「この中だよ。私はあの男と世界を入れ変わったんだ。始めに言っただけじゃないか、この世界から人間を消す方法があると。」

彼は、私の頬に触れると優しく笑った。

『君は、もう自由だよ。』

私は、静かに本を閉じた。

「これで、わかっただろ。君は最後は自由になるんだ。」

赤い本の言葉に、首を振った。彼は理解できないのか、小さく私の名前を読んだ。

「一体、何が不満なんだ。」

何も言わないのを、赤い本は単なる子供のだんまりだと思ったらしい。

「とにかく、話しを進めなくては…家に帰ろう。」
嫌だ。

「そんな、どんな事になってるかわかってるのに、家になんか帰りたくない。」

ママが死んでしまうのだ。

それだけは、絶対に嫌だ。

苛立った声が。

「奈津美！帰るんだ。」

赤い本の言葉は、まるで魔法のように私の体を動かした。気持ちとは裏腹に、脚は自宅へと向かって行く。

第五章 世界の終末へ

家のドアを開けた。

空気の中に錆た臭いが混じっているのがわかる。血の臭いだ。

「さあ、リビングに行くこう。」

赤い本の言葉は、優しくて静かだが私の心に重くのしかかってくる。言われるままに、リビングにいくと母がやっぱり冷たくなって床に倒れていた。

「ママ。」

母を抱き寄せる。彼女の瞳は、一点の曇りもなく澄んでいた。それだけが、唯一の救いだと思った。後ろで床を踏む音がして、振り向くと義父が立っている。右手にはナイフを持っていて、それは赤いねつとりとした光を放っていた。

本の通りになるのは嫌だったが、鍵をかけれるのは書斎だけだったので逃げ込むしかなかった。ドアを閉めて開けられないように体で抑える。

赤い本を握り閉めながら、物語の文章が頭の中をよぎった。

「あの人も、いなくなってしまうのね。」

「そうだよ。けれど、誰かが本を開くたびに、物語は始めからやり直されるんだ。」

繰り返し、繰り返し。

ではこの世界は、一体何回目だろう。

書斎のドアが壊されるのも時間の問題だ。

私は諦めてゆっくりとドアから離れた。

大きな音がした後、開かれたドアの向こうに義父が立っていた。濁った目は、これから消えてしまう愚かな男に相応しかった。だけど、私は何かを変えたくて、ほんの少しの希望を込めて、男に呼び掛けてみた。

「お父さん。」

彼は一瞬だけ、真っ直ぐ私に瞳を合わせた。
もう一度。

「お父さん。もう止めて。」
「無理だ。」

泣きそうな、笑っているような不思議な声を出したのは、義父だった。

「そんなことをしたら、この世界も、お前も、無くなってしまっ
たら。」

「知ってたの。」

「ああ、知ってたさ。もう何度同じ事をやって来たか…。」

「じゃあ、もう終わりにしよう。」

彼は首を振った。

「俺は駄目な男なんだ。そういう設定なんだよ。何も出来ないく
せに、お前に『お父さん』と呼ばれたのがこんなにも嬉しいんだ。
だけど、この台詞ひとつでも世界が変化してしまうんじゃないかと
内心ビクビクしてる。」

義父は苦笑いしているのだろう。彼の顔をまともに見られなかつ
た。

「こんな情けない父親で悪かったな…でも、一つだけ覚えててく
れ。残酷なことだけど、絶対に何があっても忘れないでくれ。」

彼は私の持っている本を僅かに開いて、下を向く私の耳に優しく
囁いた。

「どんなに不条理な世界でも、子供だけは生きていて欲しいと思

ってしまつんだ。だから俺は何度でもこの世界の中で同じ結末を迎えてやる。お前が悲しむことなんて、何もないんだ。」

「おと...。」

顔をあげた時には、もう義父の姿は無くなっていた。

私はきつと何度も、同じ結末を迎えているのだ。

「奈津美...。」

目の前に、人の姿になつた赤い本が立っている。

「幸せには、なれないか？」

潤んだ目で、男を睨む。

「結末通りになつて、満足？」

「いや、また君は笑つてくれなかった。本を読んでごらん。」

「本には最後に私が笑つたなんて書いてないわよ。」

「そうなんだ。でも、文脈的には君は笑顔で結末を迎えるはずなんだが。」

私は鼻で笑つてやった。

「これで、終わり？」

「ああ、物語は終わった。また誰かが本を開くまで我々は眠りにつくんだよ。」

「そして、また始めからなのね。」

暗闇が体を包んでいくのがわかる。

私は目を閉じた。

第一章 父親の望んだもの

私はもう、何度目かの目覚まし時計の音で目を覚ました。

「また、ふりだし……か。」

机に向かつている間に居眠りしていた、という事になっている。いつもここから始まるのだ。

窓の外を見ると、冷たい冬の光が差し込んでいて、眩しくて目を細めると、どこからか含み笑いが聞こえて来た。

「奈津美は、惜しかったよ。」

私は、それが出来上がったばかりの本から聞こえてくるのだというのに始めは気がつかなかった。

「君が話しかけてくるなんて、初めてじゃないかな？」

「いや、そんな事はない。恐らく、何度かこうやって言葉を交わしたことはあるが、それが一体何回目の事だったかは、私も忘れてしまったがね。」

そして、もう一度同じ事を言った。

「奈津美は、もう少して結末を変えてしまう所だったよ。」

私は、嬉しくも悲しくもないよ、と答えた。いつの間にか、恐らく妻が掛けてくれたのだろつ、毛布を肩にかけ直した。書斎には暖房を置いていない。何かの拍子に火が付くかもしれない、冬場は特に気をつけなければ……しかしその心配も無駄なことだというのわかつている。

明日にはこの書斎は鍵をかけられ数年間は閉ざされてしまうのだから。

「私を恨んでいるだろう。」

こんな時、赤い本は人間で言えばどんな表情をしているのだろう。「気付かなければ良かったと思う時もあるよ。けれど、僕は解っているからこそ、娘に本を残すことができる。彼女がいつかこの世界を変えてくれることを祈っているよ。」

「世界を変えれば、我々は消えてしまうのに？」

「ふふ、君は怖いんだね。」

赤い本は黙ってしまったが、私は気にせず話を続ける。

「人間の世界だけが未来を変えられるのなら、本の結末を変えた瞬間。この世界は人間の世界に、なるんじゃないかと思うんだよ。」

それが、奈津実にとつて幸せなことかはわからない。君の言うとおり私たちは消えてなくなってしまうのかもしれない。けれど、少なくとも僕は彼女に未来へと、本の結末の先に進む努力をして欲しいんだ。」

「ぱぱ。」

いつの間にか私の横に娘が立っていた。一生懸命背伸びして机の上の本を覗き込む。

「今、この本とお話してなかった？」

「さあ、どうだろうね。本には魂が入っているのもあるからね。」

奈津実は、赤い本をぱらぱらとめくり始めた。

「どこに、たましいが入っているの？」

「さがしてごらん。」

奈津実が、本を読み進めていくうちに小刻みに震え始めた。寒くて震えているのかと思って羽織っていた毛布を掛けてあげようと近寄ると、どうやら泣いているようだった。

「どうしたの？」

「奈津実、この本キライ。」

いつもは、最後まで読んでから文句を言ったりするのに、今日はどうも調子がおかしい。

「うわあああん。」

泣きながら本を抱えて子供部屋へと走って行ってしまった。

このまま放って置けば、妻が私がおかしたと思うに違いないので、とにかく後を追うことにした。

「奈津美？一体どうしたんだ。」

部屋の隅っこで泣いている娘の頭を撫でる。

投げ捨てられたらしい、赤い本を拾って私は眼を見開いた。

本はマジックでぐしゃぐしゃになっていた。

文字の上を真っ黒に、話のスジが解らなくなるくらい。

「こんなお話は、嫌なの。」

私の腕に顔をうずめながら、娘は何かを思い出すことを怖がっているようにも思えた。

いや。

私の勘違いかもしれない。

本の最後のページをめくる。

そこには、奈津実の一番好きな物語の結末が書き加えられてあった。

『みんな幸せに暮らしました。』

私は、優しく奈津実を抱きしめる。

もしかしたら、今日で最後かもしれない娘の温もりを肌でしっかりと感じる。

奈津実はきつと、結末を変えてくれる。

未来を自分の手で開いて、遠くへと旅立ってくれるだろう。

きつと、その時。

本の世界は……。

父の書いた本だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5440p/>

本の世界は崩壊する

2010年12月19日22時52分発行